

クラッシュ・ブレイズ

海賊とウェディング・ベル

茅田砂胡

Sunako Kayata

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくするには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

D 挿 口
T 画 絵
P

ハ 鈴
ン 木
ズ ・ 理
ミ ケ 華

1

《ピグマリオンⅡ》は一仕事を終えて、リングアイ宙域の宇宙施設NC5に入港しようとしていた。

「今回は楽な仕事だったなあ」

操縦士のトランクがのんびりと言う。

それは機関士のタキも航宙士のジャンクも同じで、意識は既に上陸した後に向いているらしい。

「これでしばらくは陸暮らしだな」

「まあ、陸と言ってもオアシスだけだよ、こんな辺境にしては悪くないぜ」

NC5の施設を調べていたジャンクが嬉しうに話している。オアシスは場所によって施設の内容や充実ぶりにかなり差があるからだ。

いつも極限の航行を続けているこの船には珍しく、

何とはなしにのどかな空気が漂っている。

誘導波に乗った《ピグマリオンⅡ》はしずしずと宇宙港に進入して、指定の位置に着いた。

「こちら《ピグマリオンⅡ》。入港完了」

後は船を停泊させて上陸するだけ——という時に、管制から逆に連絡が入った。

「マクスウェル船長に恒星間通信が入っています。

キャピタル・ジェネシスのログンスさまからですが、おつなぎしますか」

「どうぞ」

答えながら、ダンは休暇に向かっていた気持ちを切り替え、乗組員の三人も無言で構えた。

辺境最速船として名高い《ピグマリオンⅡ》には飛び込みの依頼がよく持ちかけられる。たいていは人命に関わるような緊急の用件だ。そういう場合は、ダンも状況が許す限り断らないことにしている。

次に受けた仕事まではまだ少し余裕があるので、ひよっとしたら、このまま出港することになるかと

思いながら通信に出た。

画面に現れたのは髪の白い柔和な顔つきの老人で、共和宇宙でも五指に入る大手保険会社キャピタル・ジェネシスの役員、ビル・ロギンスである。

ロギンスはにこにこ笑いながら話しかけてきた。

「お久しぶりです、マクスウェル船長。いや、実にありがたい。その近辺で快速船を探していたところ、船長がいてくださるとは、これこそ天の助けです」

言葉は大げさでも、口調は至つてのどかなものだ。この様子からすると緊急性は低そうだと判断して、ダンは苦笑しながら首を振った。

「ロギンスさん。仕事の話なら申し訳ないがお断りしますよ。これから休暇でしてね」

「おやおや、先手を打たれてしまいましたか」

ロギンスは困ったように手を広げてみせたものの、引き下がるつもりはないらしい。

「しかし、そこは休暇を楽しむには少々寂しい場所ではありませんか？ 船長の次のお仕事は確か

三週間後だと思いましたが、言うなれば待機中と判断してよろしいかと存じますが」

スケジュール

予定を知られているのは《ピグマリオンⅡ》もキャピタル・ジェネシスの保険に入っているからだ。

「そこで提案ですが、どうせなら次のお仕事の後で、本物の海と太陽と美女たちに囲まれた最高の休暇を過ごされてはいかがですか。無論、費用はこちらで負担致します。運んでいただきたい積荷はそこから百二十光年先のオアシスLS9に用意してあります。《ピグマリオンⅡ》の性能ならば一度の跳躍で充分移動できる距離です。問題はその後でして——実はガリアナ星系へ跳んでもらいたいのです」

ダンの表情が少し変化した。

ガリアナ星系は年間数十万隻が通行する航路だが、海賊が跳梁跋扈することでは有名な宙域でもある。

ちやうりょうはっこ

非武装船では海賊の獲物になってしまいかねない。

《ピグマリオンⅡ》なら武装もしている。足も速い。

海賊と渡り合つて退けたことすらある。

「現地の状況は船長もご存じかと思ひます。海賊の被害を減らす切り札となるかもしれない品物でして、確實に、なるべく早く届けていただきたいのです。マクスウェル船長以上の人材はいないと思えばこそ、まげてお願い致します。——どうか、引き受けてはいただけませんか」

ダンは苦笑しながら、やれやれと首を振った。

断ろうにも既に断れない雰囲気だが、船長として確かめなければならぬことがある。

「積荷は何です？」

「《門》探知機です」

「——何ですって？」

聞き間違えたかと思つても仕方がない。

それは三十年も前に使われなくなつた機械である。見捨てられたと言つてもいい。

完全に過去の遺物であり、間違つても高額料金の快速船を雇つて届けるような荷物ではない。

しかも、ガリアナという物騒な宙域で、どうして

そんなものが必要なのか——。

ロギンスは表情を引き締めて頷いた。

「驚かれるのはもつともですが、お聞きください」
そうしてロギンスは事情を説明し始めた。

少々込み入つた長い話だったが、ロギンスは説明上手だったし、ダン是要点を掴むのに慣れていた。

事態を飲み込めば、決断するのも早かつた。

仲間たちに視線で確認を取ると、タキは既に船の稼働準備に入つており、ジャンクもトランクも肩をすくめながら了承の意を示している。

ダンはそのと微笑して、通信画面に眼を戻した。

「わかりました。お引き受けしましょう」

「ありがたい！ よろしくお願い致します」

かくて停泊するはずだった《ピグマリオンⅡ》は手早く出港準備を整え、再び飛び立つたのである。積荷を受け取つてガリアナ宙域に着くまで三日。《ピグマリオンⅡ》ならではの快挙だった。

普通の貨物船ならこの三倍近い時間がかかる。

今回、荷物の届け先には惑星でも宇宙港でもなく座標が指定されていた。

そこで荷物が届くのを今か今かと待っていたのはマース軍の軽巡洋艦《ホーネット》である。

艦長のトラヴァース大佐は《ピグマリオンⅡ》に通信を寄越してダンに感謝を示した。

「ガリアナによるこそ、マクスウェル船長。《門》^{ゲート}探知機^{キャッチャー}を持つてきてくださって感謝します」

トラヴァース大佐は愛嬌のある笑顔が魅力的な、なかなかの好人物で、ダンも挨拶^{あいさつ}を返して言った。

「驚きましたよ。まさか今になって、これが必要になるとは」

「同感です。わたしもまさかこの艦にそんなものを設置することになるとは夢にも思いませんでした」

最新型の軍艦と、使われなくなつて久しい過去の遺物——何とも不思議な取り合わせである。

大佐は部下に積荷の受け取りを指示した後、ふと思いついたようにダンに話しかけてきた。

「ところで、船長。次の仕事まではいくらか猶予^{ゆうよ}が
おありだそうですね」

「ええ、次は十八日後にヒスター星系です」

隠すこともないので正直に答えると、大佐は眼を見張った。

「ほう……それはまた辺境ですね。ここからだと十四日はかかる」

これには思わず笑みをこぼしたダンだった。

軍艦というものは、いざともなれば無茶をするが、平常時は意外に安全航行なのである。

辺境最速を自負する《ピグマリオンⅡ》としては、到底そんなのにのんびり跳んではいられない。

「お言葉ですが、それでは仕事になりません。この船とわたしの乗組員^{クルー}なら五日で充分ですよ」

「おお、それは頼もしい。——実はですね、そこでご相談があるのですが」

トラヴァース大佐は嬉しそうに身を乗り出した。「船長が運んでくれた探知機は五台あります。」

その一台を引き受けてもらえませんか」

「何ですって？」

「無論、ヒスターに跳ぶまでで結構です。使い方はご存じでしょう？」

「ちょっと待ってください！」

さすがにダンも焦^{あせ}って言い返した。

「無茶を言わんでください。わたしは一度も《門》^{ゲート}探^{ハシティング}しなどしたことがないんですよ」

大佐は苦笑して肩をすくめてみせた。

「それは我々も同じことですよ。情けない話ですが、若い連中の中には《門》^{ゲート}探知機^{キョウチキ}を見たことがないという者もいるくらいです」

無理もない。三十年前に姿を消した機械だ。

「現在ここには我々の他にエストリア、ダルチェフ、ブレイヌ、ルンドの艦^{かん}があります。手分けして搜索^{さくさ}に当たりますが、軍艦^{くわん}だけではどうしても範囲^{かたまり}が偏^{ひとへ}りがちになります。民間の協力が必要だと考えていたところなのです。報酬^{ほうご}の出ない仕事で恐縮ですが、

この宙域で今、何が起きているかはご存じでしょう。助けをと思つて協力していただだけませんか」

これまた断りにくい雰囲気濃厚である。

次の仕事まで時間があるのも本当だから、ダン^{あきら}は諦^{あきら}めて大佐の要請に応じることにした。

「努力はしますが、ただし、期待されては困ります。たった二週間で《門》^{ゲート}を発見するなんて、宝くじに当たるよりも低い確率ですからね」

釘を刺すと、トラヴァース大佐は楽しげに笑った。

「もちろん《門》^{ゲート}探しの難しさは承知していますよ。そんな無茶は言いません。そうではなくて船長には我々が通常取らない航路を飛んでもらいたいのです。船長の飛んだ航路に《門》^{ゲート}がないとわかればそれで充分です。なぜなら、そうすれば、その宙域は次の搜索範囲から外^{はず}すことができます」

ダンも安心して笑い返した。

「そう言ってもらえると気が楽です。——それでは、張り切つてうろうろすることに致しましょうか」

「よろしく願います」

そんなわけで《ピグマリオンⅡ》は積荷の一台を船内に残したまま、ガリアナ宙域を航行し始めた。

《門》^{ゲート}探知機はその名の通り、《門》^{ゲート}を探知したら自動的に知らせてくれる便利な機械だが、致命的な弱点がある。探知範囲が非常に狭いことだ。

しかも、《門》^{ゲート}と呼ばれる現象はせいぜいが直径五キロメートルほどしかない。

従って問題となるのは、《門》^{ゲート}探知機を搭載した宇宙船で『どこ』を飛ぶかである。

とはいえ、今回の搜索の対象範囲は直径百数十億キロメートルのガリアナ星系全般ときている。

常識的に考えれば、どう考えても無理な話だ。

自分で言ったように期待はできないと思っていたダンだったが、運は不公平にもダンに味方した。

搜索を始めてわずか五十時間後、《門》^{ゲート}探知機に反応があつたのである。

これには当の《ピグマリオンⅡ》の乗員のほうが

呆気にとられた。何かの間違いではないかと焦って

念入りに確認したが、本当にそこに《門》^{ゲート}がある。

ダンと仲間たちは呆然と互いの顔を見合わせた。

「嘘だろう!？」

「いやはや、当たるも八卦^{はっけ}当たらぬも八卦と言うが、

まさかなあ……」

昔は《門》^{ゲート}探しを仕事にしながら一生かかって一つも見つけられなかった奴もいるっていうのに」

往時を知っている彼らは何とも言えない顔になり、ダンが全員の感想を締めくくった。

「まあ、当たる時はこんなものだろう」

《門》^{ゲート}発見の第一報を出すと、ガリアナ星系にいるすべての軍艦が応えてきた。

その中でもダンの運んだ《門》^{ゲート}探知機を積んだダルチェフの駆逐艦《グランピール》が近くにいて、艦長のキーツ中佐は直々に通信を寄越してきた。

「お手柄ですな。マクスウェル船長。まさか三日と経たずに《門》^{ゲート}を発見するとは驚きです。ぜひとも、

経たずに《門》^{ゲート}を発見するとは驚きです。ぜひとも、

引き続き協力をお願いしたい」

中佐は頭髮を短く刈った丸い頭が特徴的な人物で、顔は笑っているが、細い眼は鋭く光っている。

トラヴァース大佐と違つて軍人らしい雰囲気だと思ひながらダンと言つた。

「その前に、この《門》^{ゲート}の突出点を確かめる必要がありますが、本船にはその用意がないんです」

「我々が確認します。じきに到着します」

その言葉どおり、《ピグマリオンⅡ》の探知機が《グランピール》の姿を捉えた。

と、その時、《グランピール》の艦橋で航宙士が鋭い声を發したのである。

「艦長！ 《門》^{ゲート}に跳躍反応です」

「なに？」

偶然にも、《ピグマリオンⅡ》が発見したばかりの目と鼻の先にある《門》^{ゲート}を通じて、何者かがここに出現しようとしているのである。

艦橋は俄然^{がぜん}、色めき立った。

ちょうど通話中だったダンにも艦橋のやりとりは

聞こえていた。ダンにとつても予想外の事態だが、キーツ中佐はすかさずダンに指示を出してきた。

「幸運の女神が我々の味方をしてくれたようですな。ここから先は我々の仕事です。下がってください」

ダンにも異存はなかった。

戦闘となれば軍艦の出番だからだ。後方に退いて、《グランピール》の勇姿を見物することにした。

キーツ中佐は鼠^{ねずみ}が穴から飛び出してくるのを待つ猫のように舌なめずりしながら《門》^{ゲート}に眼を注いで、不敵に笑つたのである。

「馬鹿な海賊め。飛んで火に入る夏の虫とはまさにこのことだ。——砲撃用意！」

2

「おばさん、えらい人はどこ？」

昇降機に向かって歩いていったジャスミンは、最初それが自分に対する問いかけだとは思わなかった。

かなり舌足らずな幼い少女の声だったからだ。

気にせずに通り過ぎようとしたら、同じ声がもう一度、ちよつと苛立たしげに言ってきたのである。

「おばさん。あたし、えらい人に会いたい」

さすがにジャスミンも立ち止まって、足下を見た。

六、七歳くらいに見える女の子が精いっぱい上を見上げていた。そこまでしないと百九十一センチのジャスミンの顔が見えないのだ。

こんなに小さいのに、一人でこの巨体に臆せずに声を掛けるとは見上げた度胸である。

ジャスミンが今いるのは惑星アドミラルのクーア本社だった。

この本社はアドミラルの観光名所でもあるから、一階ホールには平日の午後でも見学者が目立つが、女の子の近くに保護者らしい人影はない。

真っ白なブラウスに水色のジャンパースカート、茶色の巻き毛に赤い髪飾りをつけている。その髪も手入れがよく行き届いているし、身なりからすると中流家庭以上の子どもだろう。

色白の肌、ぱっちりとした大きな眼が可愛らしい、かしこそうな顔立ちの女の子である。

自分を見下ろしてくる人の迫力に緊張しながらも、ジャスミンをじつと見上げて動こうとしない。

ジャスミンは微笑を浮かべて、少し腰をかがめて、女の子に話しかけた。

「迷子かな、お嬢ちゃん」

すると、女の子はたちまちむつとした。

「あたしもうじき八歳よ。赤ちゃんじゃないわ」



「そうかな？　ちゃんとしたレディだったら初めて会う人に『おばさん』なんて話しかけたりはしないものだぞ。そんな子どもはお嬢ちゃんで充分だ」
 ジャスミンにしては優しい口調でたしなめると、女の子は真顔で尋ねてきた。

「なんて言えればいいの？」

「その言い方もいけない。いいんですか、だ」

ぼうじやくぶじん
 傍若無人の代名詞のようなジャスミンであるが、

実は軍人出身なので、礼儀にはなかなか厳しい。

「若い人にはミス。年配の人にはミセスかマダム。わたしを呼ぶ時はミズでいい」

女の子はちよつとこんがらがった様子だったが、ぺこんと頭を下げると、まっすぐ背中を伸ばして、精いっぱい気取った口調で言ってきた。

「こんにちは、ミズ。この会社のえらい人はどこにいますか？」

「ここにいる」

女の子が眼を丸くする。

ぽかんと口を開けたところを見ると、次の言葉が続かなかつたらしい。

ジャスミンが二、三步動いて昇降機の前に立つと、認証が働いて、音もなく扉が開いた。

ジャスミンは女の子を振り返って、今は空っぽの昇降機を親指で示して笑いかけたのである。

「これは上の会長室に直通だ。乗ってみるか？」

女の子はますます呆氣にとられた。

その昇降機は薔薇色大理石に飾られていて、開く前の扉は金色にぴかぴか光っていて、これ一つだけ他の昇降機とは違う場所にあった。

『えらい人が使いそう』に見えたのだ。

混んでいる他の昇降機と違って、待っている人も全然いなかった。そこへこの人が近づいてきたから聞いてみただけなのに。

さすがに、とんでもない人に声を掛けてしまったことが女の子にも飲み込めたようで尻込みしている。知らない人と狭い箱の中で二人きりになるのは、

いくら何でも恐い。

第一、どこへ連れて行かれるかわからない。

それでも、ごくんと唾を飲みながらも、女の子が勇気を振り絞って小さな足を踏み出そうとした時。

少し年上の少年が息せき切って走ってきた。

「何してるんだよ、ミリイ」

やはり肌の白い可愛らしい顔立ちだが、こちらは見るからに腕白そうな、悪戯な眼をした少年である。なまじの男より遙かに身体はらの大きいジャスミンをうさんくさそうな眼でじろじろ見つめて、少女との間に身体を割り込ませて注意した。

「知らない人についていくなんて言われてるだろう。怪しい奴だつたらどうするんだよ」

まったくもって正しい言い分だが、それを当の『怪しい奴』を睨みながら、丸聞こえになるように言つたのでは台無しである。

男の子に手加減する必要はまったく感じていないジャスミンは片手で少年の頭を驚掴みにした。

文字通り、がしつと捕まえたのだ。

ちよつと力を入れて持ち上げただけで、男の子の足は途端に床から浮き上がりそうになる。

「おまえの両親は大人にそんな口の利き方をしてはいけないと教えてくれなかったのか？」

少年は気の毒に蛇に睨まれた蛙ならぬ驚の鉤爪にがっちり捕まえられた兎のような有様だった。

身体を硬直させて、ひたすら眼を白黒させている。見ていた少女のほうが青くなつて言つた。

「ライスを放して。ミズ」

ジャスミンも本気で痛めつけるつもりはないので、少年の頭を放してやつた。

片手で頭を首から抜かれそうになるという経験に（しかも女の人に）びっくり仰天して、少年は声も出せないでいる。

ジャスミンは再び少女に向かって話しかけた。

「えらい人に何か用なのかな？」

女の子はちよつと怯んだ。

躊躇^{ためら}いがちに男の子と眼を見交わし、思い詰めた表情でジャスマインを見上げてきた。

「パパを返して」

幼いなりにその様子は必死で、真剣そのもので、まるで泣くのをこらえているような顔だった。

よほどのことだ——とジャスマインは直感した。

少なくとも、パパが仕事ばかりしていて遊園地に連れて行ってもらえない——といった子どもらしい悩みや不満にもとづいたお願いではないらしい。

「パパの名前は？」

「ロイド・ウェップ」

「パパの仕事は？」

「お船に乗ってるの。《セシリオン》よ」

「わたしはジャスマイン・クア。レディは？」

「ミランダ・ウェップ。こっちは兄さんのライス」

「お兄さんか。——妹を守ろうとしたのは立派だぞ、ライス。ただし、妹から眼を離れたのはよくないな。ちゃんと見てくれと頼まれなかったのか？」

凶星を指されて少年は気まずそうな顔になったが、ミランダはおおいに不満そうだった。兄の監視など必要ないと言いたいのだろう。

「あたしもう、そんな赤ちゃんじゃないわ」

これにはライスが憤然^{ふんぜん}と文句を言った。

「生意気言うなよ。今だって俺が止めなきゃついて行こうとしてたくせに」

「ライスがお船の模型ばかり見てるからじゃない。子どもなんだから」

「うるさいなあ」

「こらこら、喧嘩^{けんか}はよせ」

ジャスマインは苦笑しながら、足下で始まった兄妹喧嘩の仲裁^{けんせ}をしてやった。

こんな若い兄妹だけで本社^{こし}まで来たはずはないが、やはり保護者らしい人の姿は見あたらない。

そこでジャスマインはひとまず昇降機の扉を閉めて、歩きながら子どもたちを手招きしたのである。

「おいで、二人とも。おやつにしよう」

ライスがたちまち血相を変えて飛び上がった。

「そんなのだめだよ！」

知らない人についていくと言われているのに、知らない人に何か食べさせてもらうなんて、もつとまずいと思ったのだろう。これまた正しい判断だが、相手がジャスミンでは少年の抵抗など通用しない。

「外へ行くわけじゃない。ここには食堂もあるんだ。迎えが来るまでそこで待っていていればいい」

「でも！」

ジャスミンは真面目に言い諭した。

「そろそろおやつ時間だろう。子どもがちゃんと食べないのは身体に悪いんだぞ。それとも、お腹は空いてないのか？」

少年は途端に言葉に詰まって、うろうろと視線をさまよわせた。

どうやら胃袋のほうが正直なようだった。

「おまえたちが食堂にいることをちゃんとあの人に話していこう。それならいいだろう？」

ジャスミンが受付を示して言うのと、子どもたちは顔を見合わせて、おそろおそろ頷いた。

クーアは福利厚生が行き届いている会社なので、子ども連れで入れる食堂も用意されている。

ジャスミンは子どもたちをその食堂に連れて行き、ミルクとホットケーキをご馳走してやった。

ライスはミランダより二つ年上の九歳だという。

男の子の意地があるのか、兄の面子か、むすっと黙り込んでいたが、眼の前に出された美味しそうな食べ物には諸手をあげて降参した。

あつという間にホットケーキとミルクを平らげて、ごちそうさまでしたと、きちんと挨拶した。

「おいしかったかな？」

「うん！」

「それはよかった。では、パパの話を知ろうか」

「パパは外洋航路の船乗りだよ」

「立派な仕事だ。今も宇宙を飛んでいるのかな」

ライスの表情がたちまち曇った。

妹と同様、彼も父親の不在を不安に思っている。

むしろ妹より年嵩としなきなだけにその不安もひとしおで、少年は押しつぶされそうになっている。

けれど、彼は妹の前でその感情を表に出すまいと懸命けんめいに踏ん張り、突っ張っているように見えた。

「パパは……」

ライスが言いかけた時、食堂の入り口を見ていたミランダが嬉うれしそうな声を上げた。

「おばさん」

慌あわただしい足取りでやってきたのは二十七、八の女性だった。すらりと背が高く、機能的なスーツが際だったスタイルのよさを強調している。

黒髪の、目鼻立ちの整った華やかな感じの美人で、これをおばさん呼ばわりは失礼だぞとジャスミンはまた言いかけたが、女性は受付で事情を聞いたのか、急いでジャスミンに頭を下げてきた。

「トリッシュ・ウォーカーです。姉の子どもたちがお世話になりました」

それなら正しく『叔母おばさん』である。

ジャスミンも自己紹介してトリッシュに尋ねた。

「あなたがこの子たちを連れていらした？」

「いえ。姉ですけど、今……ちよつと」

トリッシュは眼をそらして苦い顔になった。

ちらつと兄妹のほうを見やったらところを見ると、子どもたちの前では言いにくい事情があるようで、無理に繕つくろった口調で言ってきた。

「ありがとうございます。——さ、行きましょ」

子どもたちを立たせて帰ろうとしたトリッシュを制して、ジャスミンは彼女にも座るように促うながした。

「差し支えなければお話を聞かせてもらえませんか。

この子たちの父親はどうしたんです？」

トリッシュの青い眼に警戒の光が浮かんた。

「あなたは？ クーアの方ですか？」

「そうとも言えるし、そうではないとも言えますね。一種の顧問こもんのようなことを務めています」

トリッシュはこの相手をどう判断したらいいのか、

量りかねているようだった。信用してもいいのかと怪しみ訝しむ顔つきでもあった。

トリッシュの眼に映るジャスマンは年齢三十前後、腰まで流しっぱなしの赤毛に、座っけていてもわかる女性とも思えない堂々たる体軀たぐをしている。

加えて他を圧倒する迫力は、間違っても大企業の顧問には見えない。

同時に『平凡』という言葉からもほど遠い。

躊躇ちゅうちうっているトリッシュに対して、ジャスマンは悪戯あくごっぽく笑いかけた。

「それとも、わたしが報道関係の人間だと言ったら、何か話したくない事情でもありますか？」

「とんでもない。ぜひ聞いて欲しいくらいですけど、違ちがうでしょう？ あなたは記者には見えません」

「大勢の人に聞いてもらいたいと思うお話でしたら、なおさらです。話してみてくれませんか。それとも子どもたちの前では言いたくないことかな？」

「いいえ。この子たちも父親のことは知っています。

——そうね、聞いてもらいましょう」

トリッシュは勇ましく言って、子どもたちの隣に腰を下ろした。

外見からしてもキャリアのある女性の雰囲気だが、ぴんと背筋を伸ばした様子は、まるで難しい商談に挑むかのようだった。

逆にジャスマンは穏やかに微笑して献立えんりつを勧めた。

「どうぞ、好きなものを」

「結構です。自分で払いますから」

態度が固いのはクーアに対してあまりいい印象を持つていないかららしい。

苦情くせいを言いに来たのならそれも当然だった。

トリッシュは珈琲コーヒーを注文し、ややあって本格的に豆を挽いた珈琲が運ばれてきた。芳しい香りかよと味に少し心が和んだのか、トリッシュはいくらか口調をやわらげて、ジャスマンに尋ねてきた。

「ガリアナ宙域の海賊のことはご存じですか？」

「報道で見た程度ですが、被害が続出しているのは

知っています」

「この子たちの父親が乗っていた《セシリオン》も被害に遭^あつた一隻です。三ヶ月前、海賊に襲われ、乗員は惑星ガリアナに抑留されることになりました。《セシリオン》はチャーチル運送の持ち船ですから、会社はそれ以来ずっと海賊と交渉を続けてきました。二十日前のことです。やっと交渉がまとまって保険会社は身代金を支払い、船と乗員は解放されました。——ただし、全員ではありません」

ジャスミンは二、三度、瞬^{まばた}きました。

「ロイドは戻ってこなかったと？」

トリツシユは苛立たしげに頭を振った。

「戻ってこなかったのはロイドだけじゃありません。わたしの婚約者も、船長もです。もうじき結婚する予定で式場の予約もさせてあるのに……」

人質にされた婚約者を心配するに足らずいぶんのんきな台詞^{せりふ}に聞こえるが、結婚式を間近に控えた女性にとっては一大事なのかもしれない。

「ミス・ウォーカー。すみませんが、わたしはその一件を聞くのは初めてです。もう少し詳しい事情を聞かせてもらわないと、判断のしようがありません。そもそもそういうお話をチャーチル運送ではなく、クーアに持つていらした理由は何です？」

《セシリオン》が拉致^{らち}される直前に、チャーチル運送の実質的な経営権がクーアに移ったからです」

チャーチル運送は大きな会社ではない。経営権の移譲^{ニユス}が報道にもならないくらいの小さな会社だ。

《セシリオン》が海賊に襲われたのはそのすぐ後で、身代金の要求は当然チャーチル運送に寄越された。

「会社自体は存続していますから、海賊との交渉はずっとチャーチル運送が行ってきました。門外漢のクーアの人たちにそんなことできつこありません。ですけれど、船とほとんどの乗員が解放されたことで、クーアは海賊との交渉はひとまず打ち切るようにとチャーチル運送に通達してきたんです」

ジャスミンは片方の眉^{まゆ}を吊り上げて驚きを示した。

「船長を含めて三人がまだ抑留されているのに？」

「そうです。——こんな馬鹿な話ってありますか」

抑えた怒りがトリッシュの声を震わせて、そんな叔母を子どもたちが不安そうに見つめている。

「チャーチル運送は驚いて、方針の撤回と交渉の継続を求めましたが、クーアは聞き入れませんでした。海賊が具体的な要求をしてこない以上、こちらから働きかけるのは得策ではないというんです」

つまりは体のいい切り捨てである。

「それで今日は姉と直談判^{じか}に来たんですが、話にもなりません。クーアの人にとって《セシリオン》の事件は既に解決したことみたいなんです。どうしてあの三人だけが解放されなかったのか、いつ戻ってくるのか、わたしたちはそれを知りたいだけなのに、そんなことがこつちにわかるわけがないでしょうと、露骨^{ろこつ}にいやな顔をされました」

ジャスミンは眉をひそめて身を乗り出した。

「この本社でそんな人間が息をしているとは驚きだ。

子どもたちの前であまり悪い言葉は使いたくないが、どこの間抜けがそんなことを言いました？」

これにはトリッシュも笑みをこぼした。

「名前はフィリップ・ソルターと言ったと思います。肩書きは確か——第五事業部第八課長でした」

「わかりました。さっそく確認を取ります。しかし、課長の無能を追及しても問題の解決にはならない」

「そうです。おっしゃるとおりですわ」

「クーアの対応は不適切だとして訴えますか？」

「そんなことは言っていません。興味ありません。わたしはただ一日も早く彼を返してほしいだけです。もちろん、他の二人もです」

ジャスミンはちよつと考えた。

船長の解放が遅れているのはむしろ理解できる。

身代金をつり上げようという魂胆^{こんたん}だろうが、他の二人との関連がわからない。たまたま選ばれたのか、それとも船長と親しい関係であったのか……。

「あなたの婚約者とこの子たちの父親は何か船長と

特別なつながりがあるんですか。一緒に仕事をして長いとか、同郷の出身とか？」

「それは……」

トリッシュが呆れたような顔で何か言いかけた時、ミランダがぱっと立ち上がって声を上げた。

「ママ！」

兄妹の母親は三十二、三に見えた。

金髪で、小柄で、少し地味な感じだが、理知的な顔立ちの美人である。妹とまったくタイプは違うが、魅力的であることには違いない。

ただし、青い眼は異様に熱っぽく、頬には赤みが差している。激しい衝動を感じている様子だったが、彼女はそれを自制できる力を持った人だった。

やはり受付で事情を聞いていたのだろう。足早にやってきた母親は子どもたちに笑いかけてやると、ジャスミンに向かって丁寧^{ていねい}に挨拶した。

「申し訳ありませんでした。子どもたちがご迷惑をおかけしまして。アリエル・ウォーカーです」

子どもたちと名字が違う。疑問の表情を浮かべたジャスミンに、アリエルは微笑した。

「夫と正式な結婚はしておりませんが、この十年、実質的な夫婦として生活しています」

「失礼しました。どうぞ、お座りください」

「いいえ。どうもありがとうございます。——さ、二人とも、おばさんにお礼を言いなさい」

「ミズよ。ママ」

娘に大真面目に注意されて、アリエルはちよつと戸惑い顔になり、ジャスミンは笑って少女をほめてやったのである。

「ちゃんと覚えたな。それでこそ小さなレディだ。えらいぞ」

「当然よ」

つんと頭をそらしてみせる。

こましゃくれた態度だが、それがまた可愛い。

ジャスミンは窓の外を示して子どもたちに言った。「二人とも。しばらく外で遊んでおいで」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。